

## □寄稿□

## 今、医療・福祉で求められる「心」、「経営」のエキスパートの育成

高橋 泰<sup>1</sup>

## I. はじめに

2018年4月、国際医療福祉大学は新設の赤坂キャンパスで、「赤坂心理・医療福祉マネジメント学部」を開設した。学科は「心理」、「医療マネジメント」の2つである。心理学科は定員60名、初年度入学者が69名、医療マネジメント学科は定員60名、入学者54名であった。東京の中心「赤坂」の246号線沿いに12階建ての新キャンパスが出現し、これまでの医療系大学の学部構成とは大きく異なる学部が誕生したので、医療界内外で大きな注目を集めている。

新しい学部を開設するにあたり、社会の変化に医療が対応しようとするとき、最も必要となってくる分野は何か、また赤坂の地にふさわしい分野はどのようなものか、という議論を重ねた。今後、図1に示すように、人工知能やビッグデータの活用が進むことが予想される。また図2に示すように、心の病を持つ人が、今後激増する。

このようなデータを参照しながらの議論の末にたどり着いた結論が、「心のケア」と「マネジメント」である。心理と医療マネジメントは、今後の日本の医療が社会の急速な変化に対応する時に欠かせなくなってくる分野であり、今後これらの分野の人材の必要性が急拡大することが予想されるので、この2つの分野が開設された。

## II. 心理学科について

まず「心のケア」の土台となるのが心理学である。学問領域で分けると大きく臨床分野と非臨床分野の2つがある。どちらかというところまで研究者が熱心に取り組んできたのは後者で、そのおかげもあって、心の働きのさまざまなことがわかってきた。日本の多く

の心理学科は文学部に属し、後者の非臨床分野の心理学科がほとんどである。

一方、前者の臨床分野は発展途上で、かつ、社会からはこの分野のエキスパートが求められている。たとえば「心療内科」を標榜するメンタルクリニックの数はどんどん増えており、一定規模以上の事業所には従業員に対するストレスチェックが法的に義務づけられた。そこで活躍しているのが臨床心理士という資格を持った人たちであるが、新たに「公認心理師」が国家資格として制度化され、2018年9月に第1回の認定試験が実施される。現場の心理の専門家はますます求められている。図3に示すように、こうした臨床分野で活躍できる人材を育てるのが国際医療福祉大学の「心理学科」の目的である。

赤坂心理学科の最大の特徴は何とんでも「臨床経験を積める」という点である。公認心理師の試験は大学の学部（心理学）を卒業後、心理学系大学院で2年間の修士課程を修了した後、資格試験を受験し、合格することが求められるが、就学している間から大学のグループ病院である国際医療福祉大学三田病院での実習を行うことを予定している。豊富な実習経験を積んだうえで試験に臨め、さらにいえば就職にも、たいへん有利である。

中田光紀学科長は労働安全衛生研究所研究員を務めた後、アメリカの国立労働安全衛生研究所チームリーダーとして活躍し、特に日本で遅れている公衆衛生におけるメンタルケアとそれに関するデータ活用では特に手腕を振るってきた人物で、この分野では国内屈指のエキスパートである。さらに家族療法の第一人者・亀口憲治先生、著書も多くマスコミにもご登場している和田秀樹先生も教授に就任した。ほかにも、現場で

<sup>1</sup> 国際医療福祉大学 赤坂心理・医療福祉マネジメント学部長

の経験が豊富な教授陣が揃っている。

### Ⅲ. 医療マネジメント学科について

医療分野は日本における「成長産業」として注目されている。理由は高齢者が増えて医療需要が増えることと、世界的にも医薬品や医療技術が進歩しているからである。雇用者数推計予測を見ても一目瞭然である。2012年時点で卸・小売業者は1093万人であったが、2030年には867万人に減ると見込まれている。同じく製造業は1032万人から926万人。ところが医療・福祉分野は706万人から944万人に増えると予測されている。就業者数でいえば2030年には国内最大の産業になる。

しかしこの巨大産業である医療には、効率的な働き方、組織運営、そして収益をしっかりと確保する「マネジメント」という考え方は、これまでほとんど取り入れられていなかった。しかし財政のひっ迫や、働き手が減っていくなどの要因により医療にも「マネジメント」が必要という考え方が広まってきている。

マネジメントの質を高めるうえで特に重要なのが「データの活用」で、学生にはその技術を徹底的に習得させる。医療界に限らず、経営へのデータ活用は今、大変注目されている。たとえばコンビニエンスストアでもICタグを改良してどの商品がいつ、どの程度、どこで、どんな客層に売れたかを追跡できる仕組みの開発が盛んに行われている。

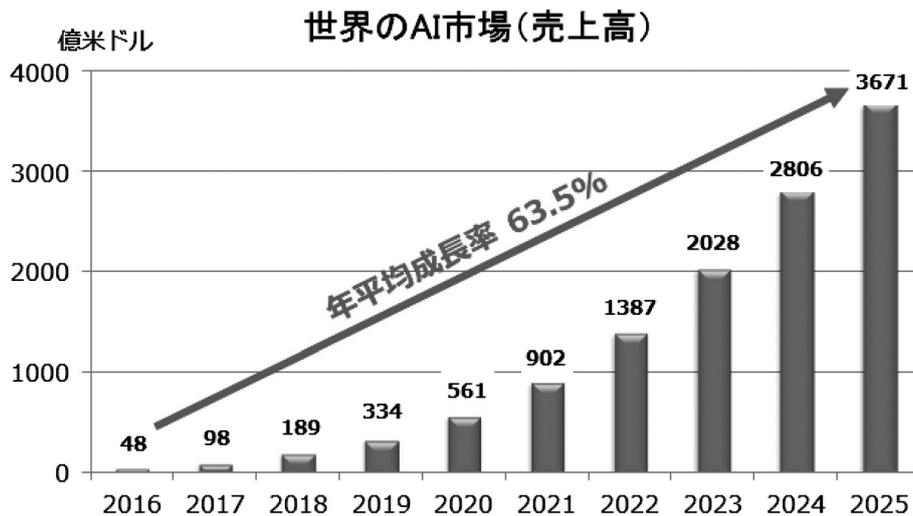


図1 世界のAI市場規模の年次推移  
出典：トラクティカ社レポート

### 世界的にみた疾病の将来予測

WHO Global Burden of Disease 2004

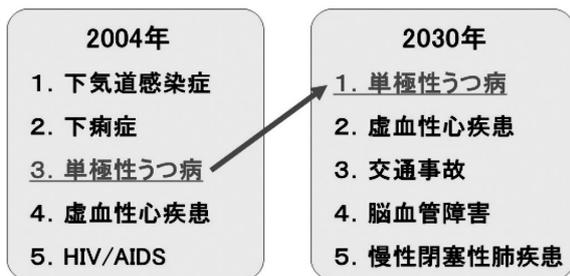


図2 疾病別患者数予測

### 今後、医療における「心理学」の需要が必然的に高くなる

- 働く人々においては、仕事のストレス、職場うつ、社会不安障がい、発達障がい、出社拒否、PTSD、燃え尽き症候群、自殺、心身症、等
- 高齢者においては、アルツハイマー、高齢者うつ、閉じこもり、心身症、自殺、等
- 学生や主婦においては、発達障がい、引きこもり、登校拒否、夫(妻)在宅症候群、自殺、等

本学では、これらの問題を解決できるこころのエキスパートを育成

図3 本学の心理学科の目的

企業のデータ活用の進化は、大きく3段階に分かれるといわれている。第1段階は、1つの企業にデータ解析の専門家が1人だけいる状態。モノ好きな社員が1人で孤独な作業をしているというケースもある。第2段階が、企業に1つのデータ解析の専門部門が立ち上がり、ここでデータ収集とデータ解析を行う人材を集約し、解析を行うという状態。多くの日本の大企業はこの段階である。今後、データ活用はさらに進展し、情報活用が第3段階まで進んだ組織になるといわれている。第3段階になるとデータ解析の専門部門はなくなり、部門を問わず社員の多くが社内社外のデータベースからデータを集め、解析し、自らの仕事に役立てていくことになる。世界を見渡すと一部の企業ではすでに実現しており、たとえばグーグルなどはその一例である。

インターネットも第1段階に相当する初期の頃は、扱うにはかなりの工学的な専門知識が必要な技術であった。しかしスマホでインターネットにアクセスできる現在の第3段階になると、慣れれば誰でも使える技術になった。データ解析というと難しそうに聞えるが、データ活用も第3段階になると、慣れればあまり

専門知識がなくとも、簡単に扱えるツールが普及してくる。医療マネジメント学科では、日本で最大の産業となるヘルスケアの世界で、情報活用が第3段階まで進んだ組織において、そこで働くために必要となる知識やスキルの基礎を、講義や演習やゼミを通して学ぶことができるようなカリキュラムを用意した。

しかしデータ処理の知識やスキルを身に着けただけでは、ヘルスケア分野で有用な人材になれない。ヘルスケア情報を取り扱うには、医療や経営の知識の習得が不可欠であり、図4に示すように、医療と経営と情報の重なった領域が「医療マネジメント」であると我々は、考えている。医療マネジメント学科には、理系の学生も、文系の学生も入学してくる。入学した学生達は、1年次にはこれら3領域の基本を学び、2年以降は自分の興味のある領域の講義をより多く取ることににより、3つの領域の知識やスキルのブレンドの割合が変わり、将来の仕事の方向性が変わっていく。たとえば診療情報管理に興味のある学生は、医療と情報の比率が高く、病院の経営管理部門やヘルスケア産業などで働きたい場合は、経営と情報の比率が高くなる。

就職先も、病院や福祉施設に限らず、官公庁や情報・

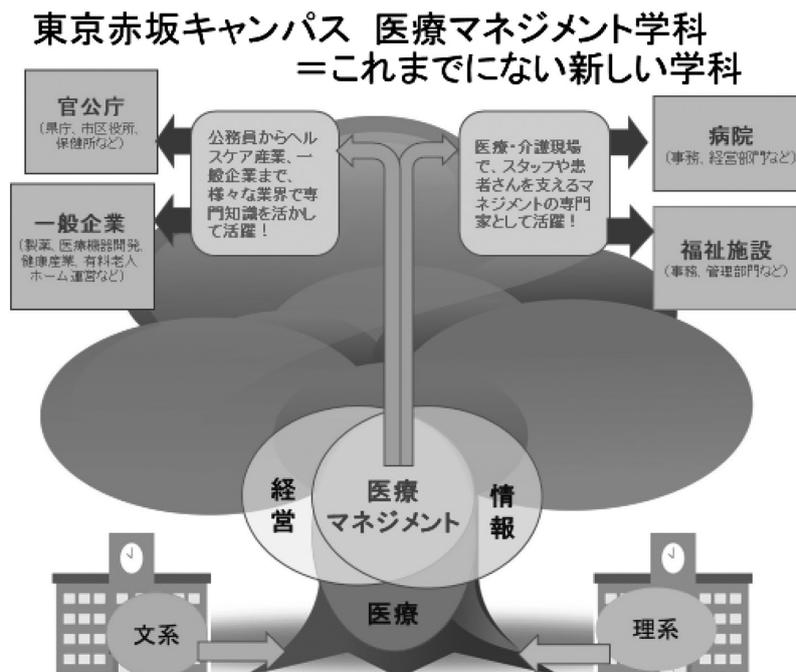


図4 医療マネジメント学科のイメージ

ヘルスケア系の企業なども選択肢になることを期待している。

医療マネジメント学科でも、「臨床現場」での研修を重視していることを強調しておきたい。特に医療の場合、データを示すだけでは現場は動かない。現場を熟知したうえでデータ解析の結果を提示し、経営改善につなげることが求められる。当学科では国際医療福祉大学の他の学部同様、国際医療福祉大学の付属病院やグループ関連病院での実地研修が組まれている。大田原の医療福祉マネジメント学科同様、1年次の施設見学や、3年次の1か月に及ぶ病院実習を行う予定である。この「現場を知っているかどうか」は、就職した後、とても大きな財産になるはずである。

医療マネジメント学科も講師陣、教育環境とも国内屈指と自負している。私自身、東京大学で医学博士号を日本初の医療情報で取得し、現在は安倍内閣の未来投資会議「健康・医療・介護」会合の副会長を務め、ICTや人工知能などを活用した国の医療や介護の将来ビジョン作成に関わっている。小畑学科長は、読売新聞の社会保障部長の経験者であり、社会保障全般に通じている。他に、医療計画見直し等検討会座長など国の厚生行政をリードする武藤正樹先生やDPCデータを中心に医療情報を活用して国の医療政策・立案に深く関わっている石川ベンジャミン光一先生をはじめ、この分野で現在、国の医療政策を担う第一人者が集結した。

#### IV. 最後に

夕刻以降の時間に、赤坂見附駅から青山方面に向けて246号線の緩い坂道を登っていくと、国際医療福祉大学の玄関横の巨大ショーケースの中でライトアップされた巨大な山車(だし)の威容が突然、目に飛び込んでくる。多くの人が足を止め、眺めるこの山車は、赤坂の氷川神社の祭りのときに、これまで街を巡回してきた由緒正しき山車である。

1年生の授業の一環として行った「赤坂を知る」という講義に、氷川神社の欄宜(ねぎ)さんが講師として赤坂キャンパスを訪れてくれたことがきっかけで、祭りに参加を希望する学生を募ったところ、半数を超える学生が参加を表明し、学生や教員が氷川神社のお祭りや赤坂の街のイベントに参加し、街との交流を深める「赤坂同協会」が発足した。現在、国際医療福祉大学の前に飾られた巨大な山車を、氷川神社の大祭りの日に、国際医療福祉大学の学生が引きながら町を練り歩くという話し合いが始まっている。この話し合いが順調に進めば今年の9月16日の氷川神社のお祭りの日に、有志の新1年生が、祭り装束で山車を引きながら赤坂の街を練り歩くことになる。さらに来年以降も新入生が加わり、赤坂町会との交流の輪がますます拡大していくことを期待している。

今後、赤坂の地に根付いた大学、そして、これからの社会に役立つ有為な人材を数多く育てる学部を作り上げていきたいと強く思うので、ご指導ご支援よろしく願います。